

I D-13 バルプロ酸投与患児における内分泌学的検討—ACTH とコルチゾールについて—

1) 筑波大学小児科, 2) 筑波大学心身障害学系

堀米ゆみ¹⁾, 浜野建三¹⁾, 岩崎信明¹⁾, 川嶋浩一郎²⁾, 城賀本満登¹⁾

「はじめに」バルプロ酸(以下VPA)が脳内でGABAを増加させ、種々のホルモンに影響を与えることが知られているが、その詳細な検討はなされていない。今回我々は、VPAおよびフェノバルビタール(以下PB)単剤治療中のてんかん患児について、血漿ACTH及び血清コルチゾールの測定を行い、バルプロ酸が視床下部—下垂体—副腎系に及ぼす影響について検討し、若干の知見を得たので報告する。

「対象」当科で抗けいれん剤単剤で治療中のてんかん患児41例、男26例、女15例を対象とした。発作型は大発作19例、複合型熱性けいれん6例、純粋小発作5例、その他11例で、対照には正常小児6例を用いた。このうちVPA単剤投与群が20例、PB単剤投与群が21例であった。年齢はVPA群 10.3 ± 4.3 歳、PB群 8.0 ± 3.6 歳、正常群 8.5 ± 4.9 歳であり、投与期間はVPA群 52 ± 32 か月、PB群 37 ± 34 か月であった。

「方法」午前9時から10時の間に採血し、血漿ACTHをRIA2抗体法、血清コルチゾールをRIA個相法で測定し、同時にVPA及びPBの血中濃度も測定した。

「結果」ACTHはVPA群 16.3 ± 8.5 pg/ml, PB群 22.5 ± 11.3 pg/ml, 対照群 32.0 ± 10.9 pg/mlであり、VPA群は対照群に比較して有意に低値($P < 0.01$)を示した。コルチゾールは、VPA群 11.2 ± 3.7 µg/dl, PB群 10.6 ± 5.0 µg/dl, 対照群 7.5 ± 4.3 µg/dlであり、3群間で有意差が認められなかった。ACTHおよびコルチゾール値とVPAまたはPBの投与量、投与期間、血中濃度及び体重当りの投与量との間には相関は認められなかった。

「結論」VPA投与群では血漿ACTHが正常群に比較して有意に低値を示した。このことは、VPAがGABAを介してACTHを低下させるという動物実験の成績を支持するものであった。一方、血清コルチゾールが3群間で有意差を示さなかったことから、上記のACTHの低下は副腎皮質機能に影響を及ぼしていないと考えられた。

I D-14 てんかん患者の社会心理的背景—アンケートによる実態調査—

横浜市立大学精神医学教室

○斉藤庸男, 宮内利郎, 喜多村雄至, 田中謙吉, 八木俊輔, 大野史郎, 山本 裕, 鈴木達也, 遠藤桂子, 保坂紘一

てんかん患者の全体像を把握し、個々人の問題点を知ること、てんかん治療の上に重要な事である。今回我々はてんかん患者の生の声を聞く目的で、独自のアンケートを作成・実施し診療録と比較検討を加えたので報告する。

〈対象と方法〉横浜市立大学精神科てんかん外来通院患者のうち診察時協力の得られたものを対象とし、無記名・項目選択によるアンケート調査を別室で行った。

〈結果〉治療者側からみた対象者の内訳は、228名(男114名、女114名)、年齢は10歳~78歳(平均年齢 38.0 ± 13.5 歳)、てんかん分類では原発全般てんかん56名、部分てんかん156名、その他16名、発作頻度は、週一回以上発作がある20名、月一回以上41名、年一回以上44名、1~3年に一回以上45名、3年以上ないもの78名、服薬が規則的170名、不規則なもの51名、不明7名である。

アンケートによる結果は、発作がまだ頻回である20名、時々みる79名、完全抑制115名、その他14名であった。発作に対する不安度との関係では、常に発作に不安をもつものの割合は頻回(45%)時々(10%)完全抑制(3%)であった。服薬態度との関係では、積極的に服薬しているのは頻回(75%)時々(56%)抑制(57%)で、薬に強い抵抗を示した者は、頻回(5%)、時々(13%)、抑制(13%)であった。コンプライアンス良好例は頻回(85%)、時々(61%)、抑制(55%)であった。結婚していたのは85名で、発作頻回4名、時々35名、抑制46名であった。職に就いていたのは109名で、頻回4名、時々44名、抑制61名であった。職場に病気を秘密にしていたのは40名、差別を受けたものは5名認めた。子供を有する例のうち、遺伝を心配したのは、コンプライアンス良好例で93%、不良例で63%であった。検査に不満を抱いていたのは、頻回(25%)、時々(46%)、抑制(31%)であった。運転免許所持者は55名で、現在運転しているのは28名、発作を時々みる例も10名(36%)認めた。事故を起こしたのは19名にみられたが、発作と関連した事故は1例にすぎなかった。これらの結果を詳細に検討を加えるとともに、当院てんかん外来に対する患者の要望についても報告する。

I
D